
隣の王子様

阿澄 利緒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隣りの王子様

【Nコード】

N8686U

【作者名】

阿澄 利緒

【あらすじ】

ある日の夜、自分のベッドに勢いよく倒れ込んだはずが、何故か見覚えのない部屋の巨大なベッドにいた奥宮千秋。自分の部屋じゃない……？ 実はそこは「王子様」の寝室で、ベッドで寝ていたそのご本人の体の上に倒れ込んでいて、そしてなんと、その王子様の「夜のお相手」をすることになり！？

コメディ時々シリアス、王子様とケンカするほど仲が良い？そんな彼女の物語。

01：始まりの夜（前書き）

文章力が皆無ですが、どうぞよろしくお願いします。
一緒に楽しんでもらえると嬉しいです。

01：始まりの夜

「おねーちゃんおねーちゃん。みんなワイワイやってたのしそうだよ！ だからおねーちゃんもおいでよ！」

自室のベランダで夜空を眺めていたところを、可愛くて仕方がない小さな末の妹に服の裾を引っ張られてそう言われたら、そりゃあもうひとたまりもない。何でしようかこの可愛らしい生き物は。思わずにへ〜としてしまう。

妹の言う通り、1階のリビングからは家族の笑い声が聞こえてくる。テレビを見ているのか、何かの話題で盛り上がっているのか、笑い声だけではよくわからない。でも本当に楽しそうだ。

だが残念ながら、今は夜空を眺めていたい気分だ。これといって特に深い理由があるわけではないのだけれど。

「美雪^{みゆき}ー。ケーキあるけど食べるかー？」

階段の下の方からすぐ上の兄の声が聞こえてきた。

兄3人、妹1人の5人兄妹の中で、このすぐ上の兄である三男とは昔から気が合わない。別に嫌いではないのだが、とにかくよくケンカする。年が離れているせいだろうか。

「けーきだつて！ おねーちゃんもいつしよにたべよっ！」

「何言つてんの。あのシスコン兄が呼んだのはあんたでしょー？」

私のことはいいから、早く下に行っておいで」

妹は「はあい！」と素直に頷くと、部屋から出て行った。本当に可愛い妹である。

その後も10分くらいぼんやりと夜空を眺め、それから部屋の中へ入る。部屋の明かりは消しているため暗いが、それでも窓から差し込んでくる月の光で足元が見えるほどは明るい。そのままベッドの方へ向かう。

相変わらずリビングからは楽しそうな笑い声。

別に眠いワケではないのだけれど。

奥宮千秋は勢いよくベッドに倒れ込んだ。
おくみや ちあき

それが全ての始まりだということも知らずに。
。

* * *

窓から差し込んでくる月の光に照らされながら、執務机で青年はうんざりしながら接待客の話に耳を傾けていた。話の内容は国の経済状況について。接待をするのも仕事の内に入るため、話を聞くくらいというのではない。だが今回ばかりは早く終わらせたいのであった。仕事を面倒だと思ったことはあまりないのだが。

（早く寝たい……）

もちろん、そのことを口に出すわけにもいかない。

話を終え接待客が部屋から出て行くと、青年は渡された書類にひと通り目を通してから部屋を出た。向かう先は寝室。メイドや兵士とすれ違う度に恭しく礼をされるが、青年はそれに一切目もくれず歩いていく。

寝室に着き、扉を開けて中へ入る。部屋の中は相変わらず暗く静かだ。本来ならクローゼットから寝まきを取り出して着替えるのだが、そのまま上着を脱いで部屋の中央にある巨大なベッドへと向かう。

眠気に誘われるまま、ベッドの上で仰向けになって目を瞑る……。

すると。

ドスン！ と体の上に何かが落ちてきた。

割と重く、衝撃も大きかったため思わず呻いてしまう。眠ろうとしていたというのに、一体何だろう。枕元にあるランプに手を伸ば

して明かりをつけ、体の上を見てみると。

漆黒の髪娘が、自分の体に覆いかぶさるようにして倒れていた。

「……………」

思考が完全に停止する。これはどういうことだろう、この娘は誰なのだろうと考える余裕もなく。あまりにも突然のことに、言葉すらも失ってしまう。

娘は何事か呟くと、ゆっくりと顔を上げる。

そして。

その髪の色と同じ漆黒の瞳とがち合い。

青年はやっとのことで、悲鳴に近い叫び声を上げた。

02：衝撃の展開

「自分の幸せな時はどんなときか？」って訊かれたら、私は「寝ている時」と答える。この18年の人生の中で、それ以外に幸せだと感じたことはない……って以前お兄ちゃんたちに言ったら「夢も希望もない寂しいヤツだな」と憐れみの表情で言われた。そう言うあんたらはどうなんですかこのシスコンども。……おおっと、話がズレた。

とにもかくにも、一番幸せなのは寝ている時。何も考えなくてもいいからであって。それに、あのベッドのふかふか具合が絶妙なのも理由のひとつ。あまりにもふかふかしすぎて、ベッドに横になってもものの5秒で眠れるくらいだ。小さい頃、このベッドを巡って三番目の兄と争ったこともある。まあ大格闘の末、なんとかこっちが勝ったわけだけど。

それで、そのふかふかなベッドには眠るとき以外にも横になることもある。携帯をいじるときとか、雑誌や小説を読むときとか。そういう場合は大抵、ベッドへ勢いよく倒れ込む。……いや、ダイブするって言ったほうが正しいか。そりやもうボフンと思いきり。だって、そのほうが体が弾んで楽しいから。

今回だってそう。

別に眠いわけではないのだけれど、なんとなくベッドに横になリたかった。そしていつものように、体が弾むあの感覚を期待しながら

ら、目をつむって勢いよく倒れ込む。

「ぐえっ」

……………ん？

あれ何だろう、このいかにも押しつぶされたときに出すような声は。明らかに私の声じゃない。ベッドへダイブして「ぐえっ」なんて声を上げるはずがない。

しかも、なんでか体が弾まない。いつもなら「ボフィン」といい音がするのに、今回は何故か「ドスン」。もしかしてベッド壊れた？ ……というか、体の下になんか違和感を感じるんですけど……。

「あれ……？」

え、何かいる？

目を開けて、恐る恐る顔を上げる。 次の瞬間、思考回路が完全にフリーズした。

見たこともない青年の顔が視界に飛び込んできた。

その深い青色の瞳とかち合った瞬間。

「うわあああああああああッッ！！！！！」
「ぎゃあああああああああッッ！！！！！」

お互いほぼ同時に盛大な叫び声を上げた。そしてお互い同時にものすごい速さで体を起こして後ずさる。って、うわあッ、この人上半身ハダカ?! ちよつとちよつとどこの露出狂!? いくらデリカシーのないお兄ちゃんたちでも、そんなはしたない格好はしないのに!!!

大体、そもそも!

「だ、誰ッ!?!」

目の前にいるその露出狂に向って怒鳴る。ベッドへ倒れ込む直前までは誰もいなかったはずなのに、目を開けてみたら体の下になんかこの人の姿が! 何で私のベッドにいる、一体どこの露出狂だ警察呼ぶぞコラー!?!

青年は苛立たしげにこつちをじろつと睨むと、

「誰だと……? それはこつちの台詞だ! 何故俺の部屋にいる!?!」
「……え……?」

そう怒鳴られ、思わず部屋の中を見回す。

まず第一に、なんだか部屋がやたらと広い。壁が何十歩も先にあって、天井も首を少し上げるほどに高い。もしかしたら家のリビングよりも広いかも。というか、確実に広いでしょコレ。

第二に、なにやらアンティークのようなテーブルやらクローゼットやら、無駄に高そうな装飾品がある。いかにも中世ヨーロッパ風な感じのデザインで、豪華に見えるのは気のせいでしょうか？

そして最後に。

私と青年がいるこのベッド。

……かなり巨大なんですけど……。

「……え……あ、れ……？」

私の部屋じゃない……？ どういうこと？

ベッドの上で呆然としてみると、キラリと、首元で何かが銀色に光る。良く見てみるとそれは 刃の切っ先。

いつのまにか青年はその手に剣を持っていて、それを私の首元に突きつけていた。そして、殺気を含んだ低い声で。

「もう一度訊く。何故俺の部屋にいる？ 何が目的だ、この変質者め」

……何この展開。

03：異世界の王子様

さっきの叫び声を聞きつけたのか、扉の向こうから慌ただしい足音や怒号が聞こえてくる。そして扉を勢いよく開けて鎧軍団が中へ入ってきた。こちらを見て、腰にあった剣を一齐に抜く。でもあいにく、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

目の前の青年もとい露出狂に剣を突き付けられているため、両手を上げながら先程言われた「変質者」という言葉に反論する。

「いきなり変質者ってなんて失礼な！ 言っとくけど、さっきまでちゃんと自分の部屋にいて、ちゃんと自分のベッドに飛び込んだはずなのに、なんでか知らないけどこの部屋のこのベッドの貴方の体の上にいただけ！ 私は何もしてないし何も知らない！ ってか、変質者はむしろそっちの方でしょうがこの露出狂！！」

「はあ？ 何言ってるんだお前。俺は寝巻きに着替えるのが面倒でそのまま上着を脱いだけであって、露出狂なんかじゃない……って、話ズレたじゃねえか！ とにかくお前はどこのどいつだ！？ 変質者じゃないのなら暗殺者か！？」

「何で暗殺者！？ こわッ！ 私はそこらにいる普通の一般人で、名前は奥宮千秋！！」

「おくみ……？ 随分と変な名前だな」

「むか。千秋が名前で奥宮が名字なの！ そういう露出狂な貴方は一体どこのどちら様！？」

こんな巨大なベッドで寝てて、平然と剣を持っているなんて、どう考えても普通じゃない……ってアレちょっと待て、なんかおかし

いぞ。 剣？

改めて青年の顔をまじまじと見つめる。

外国人にしか見られない綺麗な金髪に、海が映っているかのような深い青色の瞳。睫毛が長く、線の細い顔立ちは嘘かと思ってしまうくらいとても整っている。つまりはこの人、相当の美形。美術館に飾られている絵画から抜け出てきたんじゃないかと思わせるほどの超美形。

……金髪碧眼で、叫び声を聞いただけで鎧軍団が部屋の中へ入ってきて、そして巨大なベッドで寝ていて剣を持っているこの美形って……まさか……。

青年はわずかに眉を顰めながらも、堂々と名乗った。

「俺はこのワイアリア国第一王子、セオドル・ワイアリアだ」

お……王子様……ッ？！

あまりにも衝撃的な単語に、あんぐりと口を開ける。 え、王子様？ 英語でいうプリンス？ てか、地球にワイアリアなんていう国あったっけ？
い、いやいやいや、待て待て。 落ち着け、落ち着くんだ私。 まずは状況を把握しないと。

さつきまでは確かに自分の部屋にいた。そして自分のベッドへダイブした。うん、ここまでは確実。なのに、気がついたらこの部屋にいて、この自称「王子様」の巨大なベッドにて、そのご本人の体の上において……。ベッドがあるということは、この部屋はおそらく王子様の寝室……。

「自分の部屋にいたのに、気がついたらそこは王子様の寝室」だなんて、考えられることはただ一つ

「……………異世界トリップ……………！」

思考をフル回転させてたどり着いたその答えに、頭の中が真っ白になる。試しに自分の頬をつねってみるが、ただただ痛いだけ。つまりこれは夢なんかじゃない、紛れもない現実。いやいや、ちよつと待て。異世界トリップ？　なんでそんな非常識な^{ファンタジー}ことになつてんの……………？

まあいいや、とりあえずそれは置いて（え、いいのか私？）

「もしもし王子様。ちよつといいですか？」

「……………何だ？」

「変質者が私のほうだつてことはもう十分わかりました。わかりましたので、いい加減この物騒なモノどけてくれませんか？」

「断る」

「……ッ即答かい、この露出狂!!」

人がせつかくお願いしてるっていうのに！ 貴方は人の頼みすら聞けないんかい！？ とんでもない王子様ですねちよつと！

剣を突き付けられたままその王子様と睨み合っていると、扉の方からどよめきが起こった。そういえば鎧軍団がいることすっかり忘れてた。……やば、混乱していたとはいえ、仮にも王子様にタメ口で話した上に「露出狂」だなんて言ってしまった……！ しかも向こう側からしたら私はどこの馬の骨とも知れない変質者！ え、なに、もしかして死刑！？ 縛り首にされる！？

冷や汗をたらだら流しながら扉の方を見ると、ちょうど鎧軍団が何故か道を開けているところだった。何事かと思っていると、二人の人物が部屋の中へ入ってきた。一人は色素の薄い髪の少女。もう一人は赤い髪の男性。王子様はその二人を見ると、やっこのことで剣を納めてくれた。た、助かった……。

男性は王子様の方へ駆け寄ると、慌てた様子で何やら話しかけ始めた。安全を確かめるような質問をしているあたり、どうやらこの人は従者か何かのようだ。

一方、少女はこちらへ来ると、ふんわりと優しく微笑んだ。

「こんばんわ。わたしはリアナという者です」

「へ？ あ、はい、こんばんわ……」

「そう身構えなくてもいいですよ。安心してください、危害を加えるつもりはありませんから」

「うわ、やつとまともな人がいた！ ああああの、私が言っても信じないかもしれないけど、決して暗殺者じゃないから！ なんか知らないけど突然異世界トリップしたみたいで、気がついたらここにいて！ だからお願い、処刑だけは勘弁！！」

へんな所に飛ばされて、何もわからないまま殺されるとか嫌だ！
少女は小さく笑うと、

「大丈夫、いきなり処刑などにはしませんよ。……そうですね、このお話は明日にしましょう。今は夜ですし、貴方も落ち着きたいでしょうから」

そう言っ、王子様の隣りにいる赤髪の男性に視線を向けた。すると男性はこちらを見て、指をぱちんと鳴らした。

次の瞬間。

激しい眠気に襲われ、意識が一瞬で遠ざかった。

* * *

“眠り”の魔術をかけられた娘は、ベッドの上に倒れ込んだ。そ

の口から小さな寝息が零れる。

「……どういうことだ、リアナ」

「どうもこうもありせんわ。今は夜ですし、あまり大事にしくなかつただけです。この方が王子の寝室に突然現れたということが広まったら、大騒ぎになるに決まっていますもの」

大騒ぎ。確かにそうだ。

第一王子である自分の寝室に突然現れるなど、どう考えても普通ではない。暗殺者か、もしくは権力狙いの輩だと考えるのが妥当だ。だがこの娘はどうだ。

突然現れたにも関わらず、自分は暗殺者などではないと主張する。殺すつもりならさっさと殺せばいいものを、何故そのような言い訳をした？ 意味がわからない。

「このお方についてはわたしにお任せください。貴方はいつも通りでよろしいですよ」

「……お前がそう言うのなら任せる。正直言つて、早く寝たい」

ふう、とため息をついてから兵士たちを下がらせる 慌ただしい足音が去ると、部屋の中は再び静かになった。

ベッドの上で寝ている娘に視線を移す。

闇に包まれたかのような漆黒の髪。見たこともない衣服。どこま

でも無防備な寝顔。……というか、人の体の上に倒れ込んで眠りの邪魔をしたというのに、魔術をかけられたとはいえ、呑気に寝てるとはどういうことだ。　　なんだか憎たらしくなってくる。

「……それにしても、ふふ、あの第一王子である貴方が誰かと言い争うところなんて初めて見ました。中々おもしろいものですね」

「は？　……おいロード、お前何笑ってるんだ」

「いいえ何も？　気のせいでしょう、殿下」

「……………」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8686u/>

隣りの王子様

2011年7月26日12時48分発行